

城井壽章著

近世孝子傳

全

特32
43
廿二
一本

004266-000-1

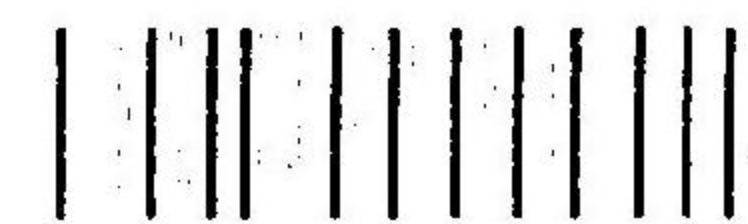
特32-43

近世孝子伝

城井 寿章 / 著

M7

ACE-0672



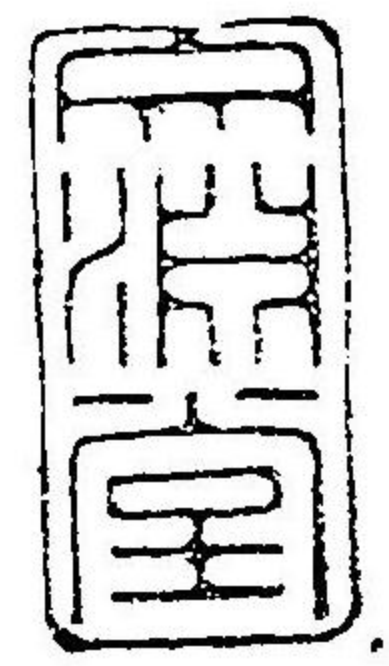
城井壽章著

近世泰西傳

明治七年
十二月新刊

槐陰書屋藏版

時 32
43



近世泰西傳

近世泰西傳
卷之三十四
一

武

武

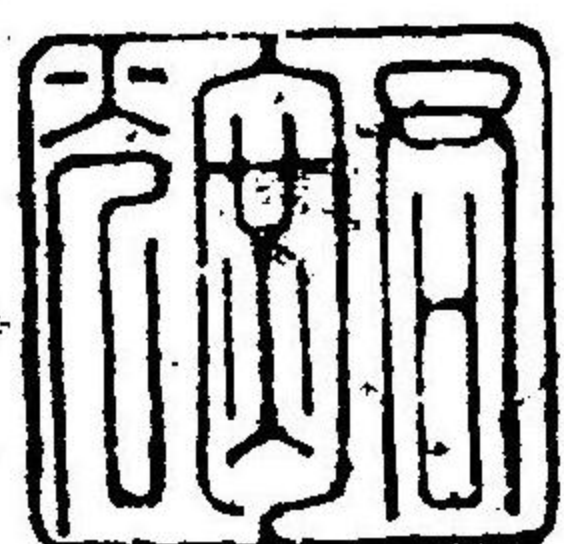
武

島津左大臣公題

風

甲戌九月

大簡



近世孝子傳

從四位權大將正賴兼正部

孝子傳の巻頭に記す所の孝子傳
は孝子の事なり其の孝子の事
は孝子の事なり其の孝子の事
は孝子の事なり其の孝子の事
は孝子の事なり其の孝子の事

讀世孝子傳

展讀孝子傳 茲注在板書 雖此為孝
子年皆以教與天地為細 若耳提筆以
授者 某何代老 閱多謹蒙勿書心 雖不
去自按實 亦皆唯唯 至陳一點 幸皆任旁
確非何秀

五山池畔逸人佐藤元長



尚志齋

訓蒙之道莫先於孝悌而小學一書論之備矣
然余謂與假異邦典籍以語之不如舉 皇朝
故事以諭之與引昔賢嘉言以訓之不如述近
人善行以導之抑我

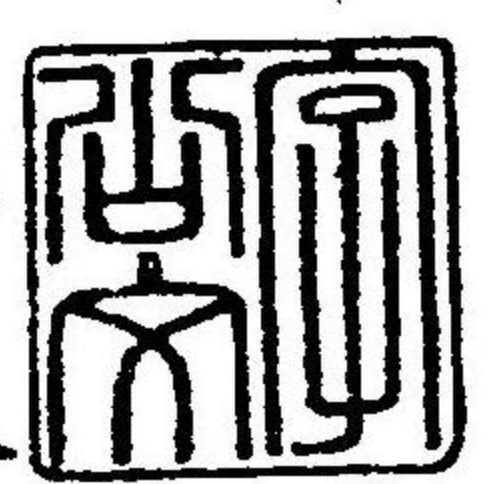
先王之治天下也以孝為先故東宮勸讀必自
孝經始其為世道慮可謂遠矣方今文運日旺
百藝俱興然世或有不知

朝旨所在先技藝而後孝悌者余竊慨之於是
編纂近世兒童篤孝尤可觀者以資童蒙之誦
誦蓋朱子著小學外編之意云

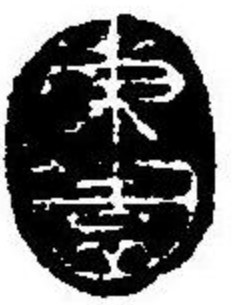
時

明治七年歲次甲戌冬十二月悔庵陳人壽章

自識於東台山陰僑居



東園青木隆書



近世孝子傳

長吉

東京 城井壽章 著
佐藤元甚 校

長吉ハ陸奥柴田郡足立村の人なり父を長五郎
といふ田地三石をり領されとも家いと貧
きより長吉四歳の時より人の家ニ養ひ
が母の病よりて家ニ歸まり其れ寛延二年
秋より幾んどもなくして父より病を患ひ

きて起つことなふも叶はば父母とも斯疾の
床に卧つれを殆ど饑餓に及べり時長吉八歳
なりしは日々山谷の險阻をものごとく分入
松の樹を伐り又枯枝などを拾ひこぼを脊負
行て村田街へ鬻ぎその價みく雪花菜やうの物
を買て歸り米麥なども交へて二親の飢を濟ひ
ける隣里親戚も長吉の孝行に感得これに憐
み米麦を贈るものもありしを斯せしうちよ
母の病ハ愈しが故ありしむその家と出去りぬ

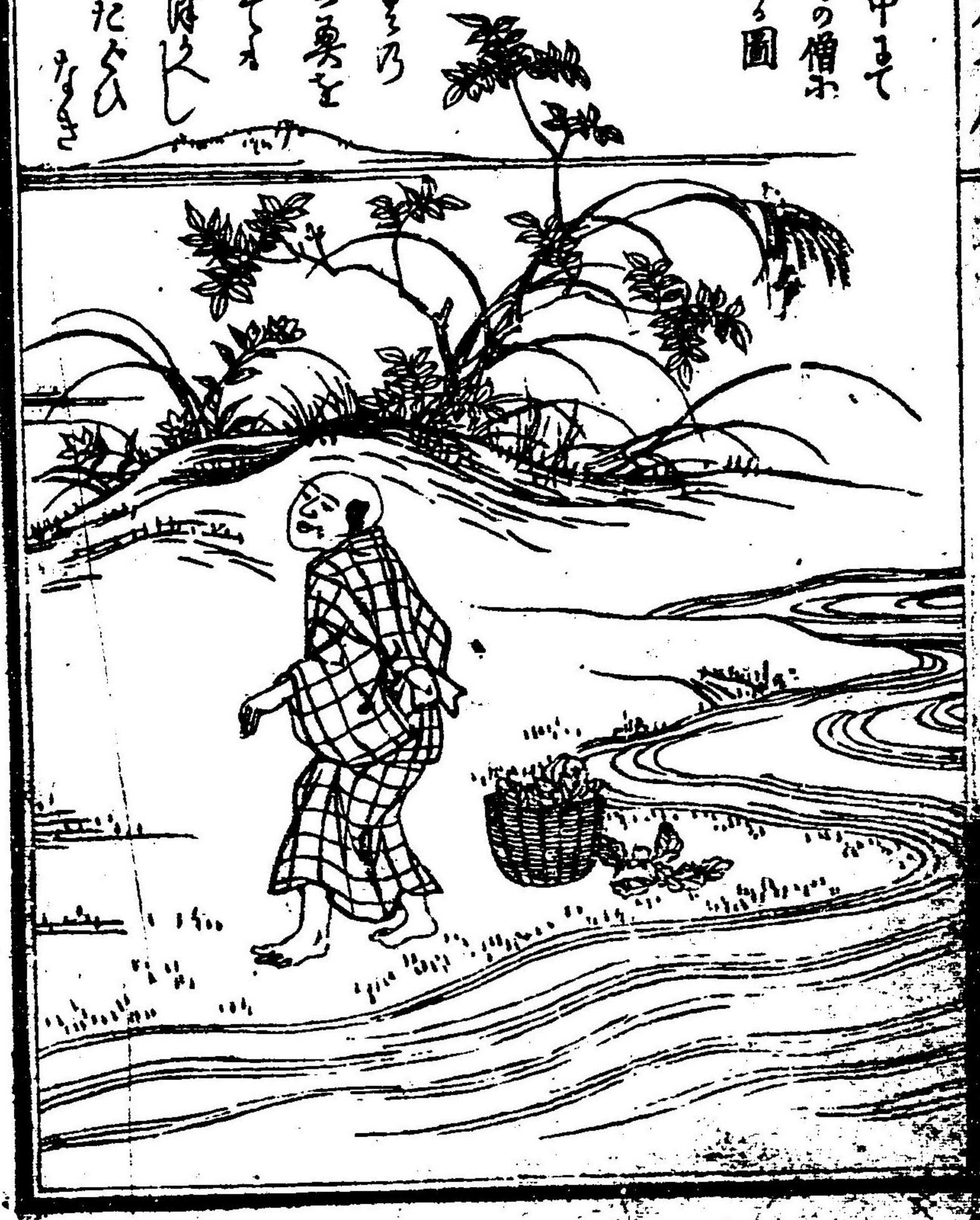
この年も暮て父の病ハいよいよ劇しく負ハ益
甚しきまば年を迎へんまとも覺束なると父の
心を痛ましむるを見て觀山は行き正月の門は
建る松を伐りて售らば年をあすなるとハ最易
らんかど云て其心を慰めりり身よまるとハ衣裳
衾褥さくもなるとは父の寒さを志のぐべき手
段もなぐ竈の傍は葉を敷て其上は卧させ夜
あく晝となぐ柴薪を焚て竈は火の絶ぬやう
なせり明年の春も長吉九歳となれはいよ

日ぶと深山幽谷にけり入る獨活茯苓どくかくふりやうなどとり
 たり市に赴きこれを書りて米味噌豆腐あとも
 買ひ飲食をこころのくまを連れ聊も父の手を
 煩さむかのまへ別は草の葉木の根などを
 くまへたる糧をを喫しける長吉はいうぬ
 深山幽谷あとも只ひとり行きて樵しける一日
 そは山中は佛宇有りてこそまは諸るものあり
 う長吉を見て妖魔あやあらんとしつづり怪
 しみしかりし近づき見ればちかづく一童子なり因よ

て其名を問へば長吉はゆかものゆかまら
 なりと答ふその後かくのし事往々ありけ
 るが長吉の孝行のゆから世は顯あらわきなりま
 一日川を行て糧はありべき草木の葉を洗ひ居
 るを管生村の龍雲寺の僧見ゆやして幼童
 の為まべき業も似むある必む故あることな
 らむ以て雙親のなきやと問へを父も病も自
 し母の故ありて去らまなれば己もやむこと
 得て手づうらかる業を為まなりと答へる

龍雲寺の僧
邂逅する圖

みちのち
三山の真
あまのり
龍雲寺
名そたひ



山邦



僧も深くその孝心を憐れ然らば寺に米を
 へんとて二里餘の山路を相拉つて寺に歸り米
 五升を與へける長吉大に喜び歸り具に其事を
 父に語りて其報ひとして獨活と薇とを父の命之
 として齎してかの寺に行りれば僧も米二升よ
 味噌をも添て與へたりとぞ長吉十歳となりて
 長も延々ともばまもく課業を勵と勉めまゝ人よ
 雇ひとして松の板などを三四枚も背に負て村田
 街に行き日よ二度づつハ往還せり夏ハ紅花を

製する家よ備をもまむと寸暇をかみて事を
 勉強し父を養ふことよの力を尽しけむ其
 篤孝隣里に著しく長吉が售るものハ人とな
 價を昂くして買ひ長吉が買ふ物ハ價を低くと
 して售りまゝ古き衣類などを與ふる者ありハ悦
 びて直ちに家よ歸り父よ看せりるかいて一
 日も怠りなく孝養を尽しけむ父の病も漸々
 よ平愈し父子とも同業を執るよ至る

郷黨なる長吉の孝志を感して長五郎が領事

傳藏
傳藏

近世孝子傳

田の租税ハ郷人心と合せくあきを償ひ其他何
らとなく長吉ハ力と添へ之を賑血まらさの
多かりけるが其事國主ヨ聞へられハ寶曆二年
長吉を召して金子若干を賜ひ其孝義を賞せ
らる時は長吉年十一なり

傳藏

傳藏ハ父を貞右衛門といふ安藝高田郡桂村の
農民なり貞右衛門田二十石を領し三男一女あ
り傳藏ハその第二子なり賦性至孝ありて善く

其父ヨ事へ兄弟の間友愛ととも厚くあつた人
争ひしことなり六歳の時より長者を敬ひ神佛
を尊と朝夕佛壇を掃除し香を焼き花を供へ
神位を拜み家の人々ふるも拜礼をまゝめ人々
拜み了るを待て戸帳を閉るを日々己の課業と
ぞなりけるまゝ村内の神社佛宇の前を過さ
心も詣り拜みすといふとある傳藏十歳のころ
なりしが其母虚勞の病より往來して床に

卧ふ一せ稍危篤きき向むかへり殊または妊娠かんありてありしをば
 快復かいふく見みるること覺束かくつなきよ一いちを松庵しょうあんとらふ醫師いし
 の父ちちは語るを傳藏でんざうその傍そばはありてことを聞憂きこ
 ひ色いろはあらはれより日夜にちや心を焦あせし思おもを苦くる
 一いちめ飲食おんじハ一々いちいち禁忌きんぎを醫師いしは質問しつもんして自ら調てう
 へ膳ぜんを供まかし薬やくを煎せんト看護かんごするの周密しゅうみつあるとよ
 老成らうせいの人ひととしくとも遠とほく及およぶとしくり日々
 は自ら松庵しょうあんの家うちに至いたりて薬やくを乞こけ。一日いちにち松
 庵しょうあんは向むかひ昨日きのう賜たまり一いち薬やくハことまでの處方じょほうと替か

是こゝりやと問とへば果はたしてその門生もんせいの鹵莽ろぼうあり誤あや
 りその他その他の家うちへ遣つかはせ薬やくを與あたへしなれば松庵しょうあん
 も大おほく愧はぢぢ弟子でしの鹵莽ろぼうあるを陳謝ちんしゃし且かつハ小兒せうに
 ぬしてその心こゝろを用もちゆるの深切しんせつあるをあらく感かん
 ぜりこれハ常じょうは母ははの服くはせる薬やくを必かならず自ら嘗試あめし
 するゆへは其味あじをよく知しりしなり又母またの食くはを
 喫くはする常じょうより減へむるを見みるハ痛いたく憂うれひ常じょうより
 も多おほけむハ悴せむむと限かぎりなり日夜にちや母ははの傍そばはあ
 ちと肩かたを撫なで脚あしを摩なり夜よハ疲つかれと撫摩なりあるら

そのまゝ眠ると何れ一夜ある人見て其ありさ
まを憐れ衣をきて覆ひしは驚きて目を覺し又
夜もまぐら撫摩りけり母まゝ乳の下は腫物を
生トおとす痛めり膿を吸出さむと速に治し
ぐとされど小兒は吸せるが毒あまなりあん
いうふせんと整師のりふを聞て傳藏自ら口を
はけりまこりもその惡臭汚穢を厭はず膿血を
吸ひ出せしむを日なむすし愈らむとぞ
傳藏常は小兒の群聚ひし喧囂も處へいざ

遊ぶことはい好まざれども母のいまは病の來し
臥ざりし前正月中元節句あどよの羣兒も隨て
遊戯ししともありしが母の病よりりより
ハ曾て戸外は出ることな一日外國人の此村
を過ざりしことあり闇村の男女先を争ひ出て
見まゝ傳藏おも見よと勸むも終は出ま又
隣家より伊勢神樂の舞を奏せしとて村中の兒童
等羣り聚ひし歡笑の声喧しけむも母の傍に
侍りて戸隙を窺ひしともなるとぞある日夕つ

近世孝子傳

く煙草を刺む薄刀みり足は傷け血の類りよ
出けるをいよと馬み歎きりるゆへその傷の痛み
はよきあやし傍の人の問ひし血出て歌ざれ
ば今宵母を看護もること能をざるを憂ひてな
り創の痛かどい少くも厭はずといひも了らざ
るは母の呼びけきを其聲は應ト直して起て母の
前より心とまどる母の心を痛めんおとを思ひて
其創傷を掩ひかくし平生の如くまをのぐり
しけりとぞ母中が産は臨みて平らる分宛し

小兒ハ死せしが病ハ漸々ハ愈えり母氏の病
瘳よあゝと殆んど一年半をくりたり炎暑は
ハ枕席と扇ぎ袷寒よハ衾蓐を暖て一日も怠る
となしその兄を祐藏といふ時ハ年十八あり是
も善く父母ハ事へて孝友の志厚きものなりけ
るが其弟の篤孝ハ感服して常ハ人ハ語りけ
ハ聞ゆるも皆涙を垂て賞歎せざるハなりとぞ
其事世ハ著しけり國主より銀子若干を賜ハ
りりり時ハ天明五年の三月めて傳藏十一歳

萬吉

萬吉ハ伊勢鈴鹿縣の人也して父を市右衛門といひ母を久米とりふ市右衛門家貧しけきハ常
 よ人ニ傭役せしむるが一日旅客の行李を擔
 む途中小て卒に倒れ死せり市右衛門二見あり
 長子ハ即ち萬吉也時ハ四歳なり次子を吉次
 次とりふこれもまゝに養ふらずして夭死せり母
 久米くく節操を守りて寡居し紡績織を業
 として萬吉を鞠養せりされど夫を喪ひ兒を亡

ひしより以來幽鬱して病と成り時々發作せり
 萬吉その傍を離さず肩を摩り腹と按し晝夜心
 と盡して看護しまゝに病の少間あまば街道に出
 る旅人の包袱まゝに短槍などを負擔し鈴鹿嶺
 と上下で得る所ハ纒は五六錢も過ぎれども朝より
 夕までよの積りて數十錢に至る是を以て帰り母
 氏を省み其欲する所を問ひ或ハ隣里へ行て藥
 餌を買求めり或ハ母氏の欲する所の甘旨を
 供へて母氏の食さるうちハ萬吉もまゝ箸を下

さび母氏その半を食て己は飽りといつて萬吉
 その餘饌を食り隣里鄉黨とな其孝義を感ト
 てその貧窮を哀と旅客行人も逢ハ必む万吉の
 事を説てこまよ錢を與へんことを請り此時万
 吉六歳ありしが比年饑饉打つて途は餓乎多
 りととも万吉母子共凍餓を免くといひ其至
 孝の徳は由るとぞ天明三年癸卯仲秋幕府の
 臣石川忠房とりひ人大坂城を發して東は歸り
 けり水口驛より轎を弄て僚友等と同く歩行

土山驛を經て鈴鹿嶺もかりりるも六七歳の
 小兒垢衣を着て敝履を穿き紙ぬぐ拭りし緒は
 錢數十錢を貫きて手は携へしが忠房等を見て
 路傍に避けるを一人これに戲まると曰く汝行
 く餞を買んとまら何ぞ其錢の多きや見荒爾
 として否々これハ阿嬭は贈らんとまらなりと
 して其錢ハ何よ由て得しやと問ふよ客の短槍
 を荷ふる阪の下まで行て賜りしなりと答へ
 けもば忠房等大よその言を奇としてあは必

故あると云ふらんと思ひ万吉も謂て曰く我等も
 隨ひ来と錢を與ふんと相拉て猪鼻の茶店も憩
 ふ此ふ一婦人あり万吉を指さして忠房等も告
 て曰くあれは孝子あり万吉とりよめりて候
 とと詳は万吉母子の事を語り錢を恵み給へり
 一と謂へり其傍は憩ひ一轎夫白丁等も其
 孝行を稱し同くこゝも惠給らん王を請へを
 忠房深く感歎し然らば其家を訪せんとして鈴
 鹿嶺を踰えて山陰を下るる茅廬六七戸あり忽

一婦人の萬吉を叱りて汝何を貴人よ先づや跟
 隨まばきなりといふを衆皆怪みこゝを問へ
 ば即ちこれ久米あり小兒四五人その庭前も遊
 び戯たりしが忠房等の来るを見て退き去れり
 忠房等万吉の宅に入りて憩ふ家たゞ四壁の
 ちりちり赤貧洗が如く久米年三十四五をりり
 て顔色憔悴蓬頭垢衣めて青き芋莖を割てあ
 りしが出て忠房等を拝し敬廬は枉顧せられ
 辱きよと述べて茶を進む忠房等曰く途中

石川忠房條友
等と萬吉の家
を訪ふ圖

神のまさを

國の初めを

あつそそ

まはすま

あま

あま

こも忠房の万吉

小贈る歌ありあ

雜記小見へたれ

あま録一ぬ



冷泉為泰

かぞへ

是

花の露

かきもつんと

あまれおそ

ま

稻葉正邦

あまちね

は

名もたの

鈴鹿の山

ゆるあ

る



て万吉の孝行と聞て我等欽羨きんせんも堪へも汝かく
 の如き孝子ありまゝ何ぞ貧窮ひんきゆうを憂へん久米くみ泣
 飲いんして之を謝し年来の不幸薄命ふくふくの事を説き且
 曰く今夕ハ十五夜あり隣里りんりの兒輩こどもハ各新にいしき
 衣服きふを着け嬉戲きげせんとも万吉ハ新衣にいもなく又
 飢渴きかくも迫おそむを一日も群見ぐんけんと與ともむ遊戯ゆうぎもすること
 能あたむば妾めかけ今朝見けさけんも謂いらく汝隣見りんけんも隨したがつて遊あそむん
 と欲ほむるるたゞ口腹くふくも充あつべきもの無なく如何いかん
 せんといふを見まゝ妾めかけの意いを推測すいさくりて少しも

泪色なみだいろなく垢衣かうい索帶さくたいもも敝鞋へいせを穿きち出て行くを
 妾めかけもも目送めくわいして覺おぼえば失哭しつかくせり毎々此この如
 きことの多おほく官等くわんとう幸さいは隣察りんさつを賜たまはれと涙なみだるが
 らは語ことの忠房ちゆうぼうもも走卒そうそつもも皆みな涙なみだを垂たり
 て感歎かんとせざるハありけり忠房ちゆうぼう曰いく世間せけんの人
 誰たれも子この篤孝とくかうを聞て心こころは愧かたじけな者ものありんや
 萬吉まんきちの至孝しこう汝なんぢの貞操ていそう天地神明てんちしんめいの照鑒せうかん給たまふ所
 あり貧窮ひんきゆうは安んやすんんとて他日たじつを待まちべしと懷なつか中ちゆうより
 白銀はくぎん若干そごかを出だして万吉まんきちと與あつこれハ些少せせうと雖な

我輩の汝はあつるよ何らば天汝の至孝を
 感賞して賜ふ所あり此上とても怠りなく益々
 孝行を盡せよといんばその同僚も各銀子をぞ
 贈りけ。母子共は感喜も堪へを厚く謝りけ。
 が萬言内よ入て掌を合せて誓首一欠一出が
 且バ衆お目を伺見て怪その故を問へハ久米
 答へておハ諸公より賜をり一物件を以て先人
 の神位は告るなりとりり衆益感歎せり忠房
 あつ久米を願て曰く人よあ飢寒よ迫まハ不

良の心を生むるそのなり是故よ小人窮まれハ
 斯は濫と聖人も戒めおくりきり假令ハ飢餓よ
 迫るとも平生の貞節を變て此良心を失ふべ
 うらび今日幸ハ我輩汝母子の如き至孝貞節の
 地の邂逅相逢ことを得られを今より年々此
 地を經過する毎よ必も慰問まべりま同僚よ
 も相告て存問まきべり君も急よ之りま
 もあつバ遠方もありとりり郵遞ハ託して
 報せよ今茲十月よ必もあつ訪ふべりして同

僚等と俱ともに懇ねんかろに説諭せつごして去さじば母子ともちの地
 は伏ふして拝謝はいしゃしてぞ別わかるる其歳十月忠房ま
 と鈴鹿嶺を過よるとして萬吉を訪とひ江戸より活いひ
 来きりし薬餌やくじあどを久米くまいに恵めぐみりる是こより浪華なみぎ
 へ更番さらばんまゐるとして必かなず萬吉母子を存問ぞんもんしけり嘗な
 て一日久米從容じゆんじゆうとして忠房ちゆうぼうに謂いて曰いく妾めかけ屢しばしば眷けん
 顧こを蒙まりて消痰しょうたんも報かひ奉ほうるとなり且また見久けんきうく
 貧窮ひんきゆうは苦くるまゝしりも妾めかけの心こころは忍しのむる所ところなり願ねが
 くの見みを救すくて奴隸ぬれいとなりし驅役くやく給たまへ妾めかけの紡績ほうしん

の業わざを執とりて生活せいかつを計からんの忠房曰ちゆうぼういく吾われも又
 久ひさくく萬吉を得えんと欲ほまれとも天あまの孝子かうしを生な
 まりし所以ゆゑに偶然ぐうぜんにありし世よの不肖ふせうのゆゑのと諭ごん
 せんとまるあり今いまその志こころを奪うばひてしことを携たづ去り
 らば恐おそくハ天あまの意いは背そむけん敢あてせざる所以ゆゑに
 りと久米其言くまいを服おしてまる敢あて請こをす忠房ま
 と同僚諸友どうりょうしよゆうに託たくし鈴鹿嶺を過よるとして必かなず
 萬吉母氏まんとしを存問ぞんもんせしし僚友りゆうゆうもある萬吉の孝義かうぎ
 を傳聞でんもんて諸人しよじんに相語あひかたまる鈴鹿嶺を經過けいごする者もの

万吉を訪いざりていなる。或人ある万吉の家の知
 りがくまきともやあらん。つとて其門を表して孝
 子万吉の家と書せり。とぞ万吉うつて忠房を送
 り土山驛の茶店も到りければ其僕從等万吉の
 来るを見り争ひ菓餅を買ひ與へたるを竹の皮
 も包み懐ふ。して諸君の祝阿母も餉りて與へ
 著せんと云り。とば母も餉るなり。を別は沽て與
 へんとてまゝ。錢あども出。恵むものも有り
 白丁走卒も皆万吉を見て感歎の餘り往々涙を

垂る。も至るとぞある。忠房の友は三橋成烈と
 つゆものあり浪華。よ赴き。途中万吉の家を
 訪ひ。其事を紀行中。詳に書載て。冷泉為泰卿
 一刪正を乞ひ。れを為泰卿。これを見給ひて。深く
 その孝義を感ぜられ。あぞ。この是をまこと。の
 花の露の歌を咏て。賜り。り。と。成烈も大に喜
 び。扁額として其家。よ掲。し。其子左衛門督為章
 哪乙巳四月例幣使。と。日光山。よ赴。り。歸路
 鈴鹿嶺を過き。り。萬吉の家を顧。り。て。手づ。く。り。錢

若干を賜も。中ぐて万吉が孝名天下に著しけ
とを丁未三月道中奉行兼原伊豫守幕命を傳へ
て万吉を江戸に召し白銀廿錠を賜ひ久米よハ
終身一人知を賜はる時よ萬吉十二歳なり是よ
り先つゝ江戶より来るもの忠房の妻の重病
を罹りて醫藥の効なきよりを傳へければ万吉
母子大よおれを憂へて日夜よ心を焦し万吉を
日々鈴鹿権現よ詣て其病の平愈を祈りけるが
忠房の妻遙よあを聞て銀子及び神社への贄

幣あどを取り調へ且つ其病状を詳し記して送
りられを万吉まゝ其廟祝よ託して之を禱り大
麻神符等を調へて贈りけるが數日を経る其病
愈ぬ人なる以て孝子至誠の感應も所なりと
し

石川忠房浪華もあり一時よ万吉の事と杉浦
某よ語を其まて講進もて之を子弟よ語る
よ舉坐感泣せざるはなうりよを嗚呼とせ
三兄ハ賤民の子よ僻郷よ生れをよより師

父の教訓を蒙りしはあらざればも其親は
事なれ至誠ハ古の賢哲といへどもこゝは過
む百世の下其風を聞ゆるの孰う感興せざらん
や逆子不悌のやのとりんどもまことに必忠心を
悛て行を改むべし因て表出して童子に示し
親は事るの標準となさしむ古人の如く李令
伯の陳情表を讀み涙を墮さるやのハを此
人必忠不孝なりと今此傳を讀み涙を墮さる
ものよ於ても余も雨りし

龜松

龜松の父を惣右衛門といひて信濃佐久郡内山
村の農民なり内山村ハ上野信濃との間なる破
風山の麓に猪鹿の類いと多く田畝を蹂躪し
五穀を妨害するゆへ村民屢々番小屋を取結
びて田畝を護り惣右衛門父子も逢月といふ
處に小屋を結びて宿りしは天明八年九月廿五
日の夕はくく龜松ハ外に出で草を刈り惣右衛
門ハひとり小屋を火を焚き卧居りしが一

龜松獐狼と
格闘して父
の危急を救
ふ圖



西邦
祝を祈りし
あつちのそと
あつちのそと
なると
あつち
あつち



ゆりあつち
その焼湯の
やうな
歎のまがも
うまそくひ
たませ
元甚
あつちのそと
あつちのそと
あつちのそと
あつちのそと
あつちのそと

の獐狼突然として来り惣右衛門が足を齧めを
惣右衛門大に驚きあまを廻りたあせし狼ま
唇より腮をかきけき齧つきたり惣右衛門いん
ともいぐさく狼の耳を掴み蹄叫まれば亀松は
此聲に驚き走り来り直に鎌を揮て狼の口は突
入るる鎌の柄折さるり父の鎌をとりて
狼の口は突入を止め倒しけしとも狼猶怒り
奮ひ起んとせしを側なる石をとり狼の口な
る鎌の柄を力を極りて打こみりしは狼の歯牙

両ツ三ツ折さるり亀松力のあらんうなり大指
を以て狼の両眼を抉り出し終りその狼を斃し
ける父數多の齧傷を被りとも死に至らざれば
扶けり家は帰り種々治療を加へ數十日を経
平愈ぬ亀松時十一歳あり亀松賦性孱弱あ
りいぐ父の危急を見り之を扶けんと身命を顧
みず猛獸と格闘し之を斃せしその親を愛を
るの至誠より出りそのなりとて代官大貫次右衛
門あれを幕府に聞えあけりうは出の年の十一

月銀子若干を賜ひて褒賞せられたり

一日客来り此傳を聞て余も語りて曰く近來

西洋某國は奇孝見あり其父海を航するを

業とせり一日その船はつり客の誤て海に

墮ち溺たるを救はんとして其父自ら海に投ぜ

し鱷魚ありて客と父とを并呑んとし其子

こそを見とて父を救はんとしてまゝ直に海に投

し小刀を以て鱷魚の腹を刺せしが鱷怒て跳

りあがり其兒を吞めりこそよりよりて父と客

とハ奇厄を逃し身命を全せりと嗚呼烈なる

か孝あるうれ之子や何ぞ我亀松と其事の

酷相似るや此ハ一擧は猛獸を斃し父を救

ひ彼ハ一身を以て鱷魚に投け父を救ふ其事

異なるもとも其孝の道を盡さよ以てりてハ一

ツなりむろし或る藩主馬を騎りて橋を過り

しが藩主を仇とし狙撃んとせしものありて

突然と橋下より跳り出まを扈從の臣等狼狽

し四方に散乱せしが一人あり相迎て格闘し

ことばを覽せり或人問て身命を君は奉るハ衆
 皆同しとて人とも一朝事の變あるは當るハ
 狼狽せざる也の幾希なり子の賦性沉毅は由
 とつども平生必ま心を養ひ膽を練の道何
 るぬやとつて我ハたゞ君を愛まると知るこ
 造次顛沛も出れを忘る事ハ不意
 發りしゆへ我もまこと不意は應ぜしありとい
 へを其まこれと聞て益喜ひ厚く恩賞を賜ひ
 一とぞ嗟夫忠臣孝子地を易へば皆然り念々

君親を愛まの至誠發まる處は隨て忠とな
 り孝とあるなり然れども質を委ねる人の臣
 たる也のハ世とよりきるやとあるは此兒
 幼弱の身をもて烈丈夫の為しとてまよとを
 あまハ真よ千古の奇孝といひべし世の平生
 豪傑をもて自ら許し腰は大刀を横へ意氣揚
 かくし人々を凌げども一朝大事は臨んと狼
 狽大節を失ふ也の天下滔々皆然らざるも
 あり此二童の風を聞の誰か赧然とて其

背よ汗せざらむや余窮よ感も所ありて此

よ附録せり

留松

留松ハ伊賀阿拜郡東條村の人あり祖父を忠七
とりよ忠七一女あり里武とりよ隣村の左吉と
りよそのを養ひ里武一配一ニ男子を生めり長
子を亀松とりよ次子ハ即ち留松あり六七年来
より里武癩を患へけむ左吉これを厭ひて自
ら其家を辞して去りる里武自ら病を護りなむ

ら老より一父忠七を伴ひて畝畝一行き耕耘

けるが在病としく病危篤一向ひけむバ力耕

るあとも能をげ終一飢渴一迫より兄の亀松

出て人の奴となる忠七も一膈を病と益困窮

如何とももる一能をす隣里の人あれを見

相隣み國主よ告訴一賑給を請りてハ天明三年

六月米若干を賜たりける時一留松よりけりハ

歳あり一が夜とたり一晝とたり一かひぐりも

人と看護一も一食餌を隣里の人一請ひ求め

留松間夜
小母の墓
を護り
しるその
故を問ふ
圖



西邦
ぬき
川も

控まはれ
まじり
まのあろを
そと神
あをれと

形変貌を

あやめあろは

ぬくは

出水のさき

送るさき

奉志



母もまゝめその病少く間あまがば出で柴を刈り
 薪を拾ひ来りて飯を炊き其欲まるところを問
 ひ心を盡し看護しりまども母終に死せり留
 松ふりく哀慟しこを河邊に葬れり是ハこの
 土俗なり天刑を病て死せしものハ人間に齒
 を得ざるゆへありまど同村の人夜更てその
 墓邊を過りけるよ一小兒の墓辺に傍徨せしを
 怪しと近づき見せば留松なりこハ如何なる故
 ふやと問へば今宵ハ驟雨ゆへ必也河水の暴

漲り阿母の流失せんことを恐む終夜看護せ
 んと思ふありといひけまバ此郷人もいと其志
 を感じ此墓地ハ水面よりハ最高りれを決して
 するこトハなりしとて懇にこれを慰めり相伴ひ
 歸り其後ハ雨降る時ハ必也行り其墓を護と
 り祖父の病まましく危篤に及びりまどソレ
 心を盡し看護せること郷黨に著しけまバ同
 年十一月國主より米を賜ひこれに賞し猶恩
 命ありて年十五ふ至るまどハ年毎に米を賜り

けりが寛政二年十一月年十五も及び又米若
干を賜りて其孝行の始終一節あるを深く感賞
しけり。

一太郎

一太郎ハ阿波三好郡重清村の人あり父を與一
とゆふ時ハ歳の凶歉も會て村民等相聚り乱を
作も與一もあつて其徒黨も加りりれば徳島府も
捕吏来りて夜中黨民の巨魁を逮捕せり
まゝ捕へられ徳島府に送致せらる一太郎時

一太郎號泣して
父の罪を赦さん
おとを請ふ圖

正邦

玉緒緒を

津なまき

おーは

おやよ

かきり

あゝらえ



十歳なりしが睡覺て大に驚き父を追て徳島
 府に至り號泣して父の罪を赦さんとして請ふ
 捕卒等怒り之を逐つども去らば日夜哭泣して己
 の身を以て父の代らんことを願へども府ありて尤
 さむ申がや、其一の斷獄梟首に定りける官吏等
 一太郎の孝志を感ずるも其幼弱を憐み錢物
 を與へ諭して歸らしむ一太郎已むとを得て府
 を去りて十二里の道程を一日ありて家へ歸り
 其より讚岐に赴き琴平の神社に詣り祈ると

尤そ七度も及ぶ其往返八里もあまきり國主蜂
 須賀侯遙よそのみとを聞てふりて孝義を感ぜ
 られ特命して與一の死一等を減しこれを國境
 の孤島に流し、一太郎を召して手紙から
 金五兩を賜ひ國光及び郡宰等も皆銀子衣服等
 を與へり、且つ國主より吏二人を命じて一太
 郎をばそは郷里に護送せらる、其後一太郎父を
 慕ふその島に赴き與一も奉事せしむ
 筑前神童あり白井龜太郎といふ切く

華も遊ひく小竹篠崎氏の門ありしが一太郎の事を聞て其傳を作せり時天保壬寅某月ゆく歳十三なり小竹其傳後より跋し曰く筑前曰井童幼好文辭壬寅秋來游浪華予適聞阿洲孝子事因語之曰以予所識我郷佐々原童二歳識字安藝安田童十歳而基已入品并子為三奇矣然皆未知成立何如也至一太郎之孝則天性之美實為昭代之麟鳳矣非奇才夙慧之可

比也童黙而退其翌作此傳來請正予知其有所感興而亦不欲為世所謂神童也為加損數字跋其尾當時奇童の一時も輩出まゝこと奇ありといへとも果して此三兒の成立如何あるを知らば獨り一太郎のそ長く天壤ともよむを歳を經る愈久し愈顯ること世をよりり區々たる技藝の流上年と同一語すべきありらざるなり

政太郎

政太郎ハ美作津山吹屋街の賈人吉右衛門の子
 たり吉右衛門罪ありて獄に繋る時ハ政太郎年
 甫十三なり自ら藩廳に詣り己の身と以て父の
 代らんことを請ふ應みそは詐あらむことを
 疑ひて允さば是より人々備役させ且づり賃
 錢を得てハ衣食を調へ獄中なる父を送輸し如
 何なる祁寒暑雨みくも少くも懈らぬ數年を経
 てまゝ初の如く父を代らんことを請ふを請
 ふ所を允さば獄に入りて父を事へんと固く

政太郎衣食
 を父に送輸
 する圖



市ゆゑあり
 あつむを
 てらる
 とやん
 市の子
 か
 業や
 あは

正邦

請ふと申すも應こつて於てかりに獄に入て試
 むらよその奉養至らざるどころなりとぞ申す
 と街長等連署して政太郎の孝状を上申し
 津山城主特命も吉右衛門の罪を釋し金子
 若干を政太郎に賜つるこゝ嘉永三年某月なり
 嗚呼十歳の児十三歳の童を多く其父を斧鑕
 の下より救ひしを孝烈ハ橋の妙沖逸勢の
 初名を妙といふ後髮漢の緹縈も遠く勝り
 と削り妙沖と称す
 と明の馮行可と伯仲の間なるべし是ハ元文

三年十一月の事とや大坂橋通りの第四街
 に住める商民ふと勝浦屋太郎兵衛といふ者
 あり長男ハ長太郎といひ養子も時よ十七
 歳なり次女を阿市といひ十六歳なり三女を
 阿政といひ十五歳なり四女を阿徳といひ九
 歳なり第五子を初五郎といひ七歳なり太郎
 兵衛廻漕の船なる載貨を賣却し其金を私
 一その船ハ海上に覆没せしと詭りしが終
 り其事發覺しと逮つられ其獄三日の間市

さらしと梟首とりしに断定せしを五人の児
等町奉行の廳に詣り哀訴し五人の命をさ
さげせと父の死を贖はんことをかこく請ひ
けはバ城代太田備中守その孝義を深く感
これに幕府へ以聞せし翌年の三月大嘗祭
をのて大赦小逢ひ死一等を減ぜられ重追放
とあるこの政太郎小先ツこと殆んと九十年
前の事ありしに當時妙仲縫業行可の流の一
時小輩出まらまると奇あらむや因てテ、は録

して英世傳ふといふ

岩次

岩次の江戸橋本街の彫工半次の長子なり幼く
しと剃刷の業を父に受學び其産業を助く半
次久しく病を致しられは家貧殆と蕩盡せり岩
次時よ歳十三なり母祖母及び弟二人あり一家
五口岩次は頼り糊口せり岩次晝に他の剃刷氏
に雇はせり幾は傭錢を得り帰り夜に燈下は版
鐫し深更も及ぶまじ寐む祖母等岩次の幼弱お

岩次夜半竊こ起て工事こ就く圖

あり哉やむ

和わさ

あやう

あひ

あひ

あひ

あひ

正邦



精神せいしんを勞ろう病びょうを生せいせんことを慮おぼり夜よハ早はやく寐ねて休息きゅうしまべ〜のバ岩次いわじも祖母そぼ等の病びょうを憂うれふをを知りそは言いふ従したがひ寝ねま就つき家人けいじんのまな敷な睡すいまをを伺うかがひ密ひそに起おき工事こうじに就つけり此この如ごとく日夜にちや華は々々と〜と少すく〜も怠おろそかすることならざるを一家いっか數かず口くち凍こ餓がの患うれを免まはぬ其母そのははもま〜貞まこと純じゆん〜と善よく姑ははも事ことへ一家いっかいと睦むつ〜と善よかさまりりまは幕府ばくふより岩次いわじを賞あづかり〜白銀はくぎん七銃しちじゆを賜たまはる祖母そぼも終身しゆうしん一人ひとり口くちを賜たまはる都下みやこ〜を聞きく

其家に至り錢物なるとを賞與せしむるの甚多し或
る日一士人來り懷中より金三兩と出しく聊
ましくも孝養する供へられよしく贈られたり家人
驚き其姓名を問へども告せしむる去りぬま
奇男子と謂へり

9

附録

下總二童

下總國の一農家は二童子あり長は歳十三幼は
八歳あり其繼母里人と姦通せしむる其父い
之を知らざりしが一夜姦夫來りて其父と酒を
酌み痛飲し父の泥酔し寝し就き熟睡せしむ
窺ひ夜半窺ふに起り刀を抜き其父を刺殺しけ
るを長兒父の絶叫する聲を聞いて倉中より之を
窺ひ見て大に驚きられども事既に如何なるか

一がとく救ふべき術もなかりきば伴りて大いし
 軒鞠の聲を發し熟睡せし中つは假裝し竊は其
 為を所と現は父の屍をば床下は埋めり去まり
 夜明を待り長見起て父は何方に在るやと問ふ
 繼母の曰く今朝早起して前村の某の家は販
 賣のたまりは赴けりと俄頃ふりて姦夫まゝと来り
 二童を拉ぐ村後の佛寺へ詣んとりくを長見こ
 せと辞して曰く我師ハ嚴ふりく一日も課を閑
 ばそは怒ふあつんことと畏るゝと例は隨ひて

弟とともよ塾ふぞ赴きける途中あく具は昨夜
 の事を弟は語り且曰く是は俱は天と戴うざら
 の讐なり彼は我輩の成長し其事を知らば復
 讐の事ありあらんうと後患を慮り我輩をも曠
 野深山の間は誘引し并せり殺さんとせらるあり
 明日まゝと必む来り我輩を勾引まべりその時彼
 と討て父の讐を報ひん汝平生木刀を帶まども
 明日ハ必に請て真刀を佩よ彼我輩の速は家と
 出んことを欲まれば必む請ふ所の如くまべり

二童毒夫を
刺して父比
讐を復す

正邦

竹節の

きんぎょ
茶おとす

むか
とく



ゆみ
あつた
鬼の
あと



さて我の事を發はらするを待て汝も力を合せよとぞ約やくしける明日姦夫果えんぶし來り誘いざなひ往ゆくと云ふ二見これに從したがひともよ出んとまゝよ臨まじ幼見頻しばしばりよ真まこと刀を請ねがて已まされば兄あにその佩あぶる所の小こ刀を解とけ授たまけ更さらままこ小刀を取出とりて佩あぶぬこままより先まづよ長見姦夫の履くつ一隻を隠かくし置おくれば出いるよ臨まみて姦夫彼方此方あつちこちとその履くつを捜た索さくせ長見詭いつはりりて喬たかよ我誤あやりて床とこの下したよ蹴か入いりままとりといひくれば姦夫匍はづ匍はづし床下とこよ入り其半身みづみづ

を没なまるを見り長見ままさず幼見こどもは胸むねして刀を抜ひき姦夫の背せを刺させを幼見こどもその傍わらわより同おなく刀を抜ひてその脇わきを刺さし姦夫脇わきと背せとを刺さして斃ころす繼母けいぼこれを見り周章しゅうしょうして出いり奔かりて關せき村むら群ぐんがり聚あひて遂ついによ繼母けいぼを追捕おしやつて獄ごよ下くだされたり此この寶曆三年ほうりきの事ことなりとぞ

舊幕府同心某なにか一ひと女あり其母隣家の奴やつと姦通かんつうし竊ひそし其奴やつと相謀あひまり本夫ほんぶを殺ころさんとし其女時むすめは歳十三とせなりあれを聞きり竊ひそし憂うれひて自らみづかりて

之を父よ告まふ母殺されん告されば父殺さる
 んこれと如何せんきと既しして自ら意を決し
 て曰く父重くして母軽し寧ろ不義の母を殺さ
 んとて中より之を父よ告れば父大に怒り刀を
 拔き母と姦夫とを殺せり即夜その女谷中の善
 光寺に奔り寺主より其故を告げ弟子となり髪を
 剃り尼とありて母の冥福を備せんことを固く
 請へども許さざるうちは父まゝ尋ね来たり仍
 り其父と相議して尼とをかりしむる幕府その

同心某刺
 姦夫一圖
 悔庵先生
 命余補之
 時属歲杪
 塵事紛冗
 奴卒寫而
 應之如夫
 貂尾狗續
 之譏因所
 不辭也

甲戌十一月
 松本楓湖



東氏女

廿九

事と聞く寺主は命とく女と以て法嗣となせし
云その事の下總の上童は肖くると以て此は合
録しと傳ふ

古より人の臣より子よりその不幸ありて綱
常の變は遭ひ復讐の責あるりの烈丈夫とい
ふとも薪は臥し戈を枕し数十年の歳月を
糜まらざるありざればその志を遂ること能
む今こは乳臭の小兒もて凶悍の仇人を一
撃は斃し與は天を戴くざるの讐を報ひしハ

振古以来いまだ嘗て聞ざる所ありその熟職
を假裝し事は臨て真刀と乞ひ履を床下は投
きもが如き余甚其智略は服せり古の曾我氏
兄弟ハハハは足らば日野阿新と美と千載の
上は媿ぶと云べし抑此童女の如きも亦綱常
の變は處しと能く人は處しとま處は處と
其事甚ど偉ありし一此時は當りて少く猶豫
せば但は父の死をものみあはれびその母も豈
能く天網を免き身命を全ふまらることを得

15
7
9

んや余深くその果斷きんげんに服せり嗚呼あゝ此兒の智
畧此女の果斷ハ天地神明の暗賛あんさん冥助めいすけして以
て此一雙美きびを成さしむ。所ところはあはれなるを、知
らむや但その姓名の傳りらざるハ遺賊いせきに堪た
へざるなり

北爪有卿画

近世孝子傳終

